

# いちばんうまい、命の水

text by Shinji Ishii  
文いしいしんじ

この冬、すっかりウイスキーにはまっちゃった。スコッチのシングルモルト、それも、アイラ島のものばかり、毎晩、ストレートで飲んでいる。

焼酎や洋酒をお湯や炭酸で割ると、つい度をこして飲み過ぎてしまうけれど、シングルモルトの場合、ひと口ごとに、体内にウイスキーが充ち満ちていく感覚がありありとわかるので、あ、この辺で、とすっきり手がとまる。「ながら飲み」でなく、お酒と対話しつつ飲む。五十過ぎるまでお酒とそういうつきあいをしたことがなかった。が、いまからでも遅すぎることはない。たぶん。

きっかけは、ワコールでひらいているお酒の講座「酒はものがたる」だ。ここ一年くらい、「ビールと夏目漱石」「赤ワインとランボー」「シェリーと松田優作」など、毎月テーマを決め、お酒と小説、映画、音楽なんかをつなぐレクチャーをしてきた。

にくみにいった。

京都、御苑にほど近い梨木神社のわき水。酒所で知られる、伏見のわき水。やはり酒所、伊丹のわき水。

参加者にはグラスとコップ、スプーンを渡した。三種から好きな水を決め、40ミリほどグラスに注いだウイスキーに、スプーンで一杯ずつ、足しては味を見、足しては味をみる。そのうちに花がひらくようにウイスキーの香りがたつ。その加水量が、そのひとつとってのおそらく「いちばんうまい、水割り」のはずだ。

お酒は、ハイランド産の「英国王のためのウイスキー」と称されるロイヤル・ブラックラを選んだ。全方向にまるくバランスのとれた、まるでピートルズみたいな一本。参加者みんな、せせらぎに耳を傾けるような表情で香気を味わっている。見てみると、ひとつによって好みの水の種類も量もまるきりちがう。

二本目はアイラ産のなかでもチヨール癖の強い、バンドでいえばXTCみたいなアードベック10年。同じシングルモルトでこんなにちがうのか！まるで海原のエキスを味わってみたいだ！しかも水を足すと味が表面だけでなく奥底へ奥底へより深くつづいているのがわ

たとえば「ラムと葉巻とチェ・ゲバラ」では、僕が訪ねたキューバの町と革命の歴史について話し、ビンテージのワインをすすりすすり、ハバナ産の葉巻をまわしのみ、最後には、プロのダンサーに登場してもらって、参加者全員輪になったり向かいあったりしてルンパの基礎を習った。毎回、テーマになっている酒の最高のものを出す、それ以外はなんにも決まっておらず、レクチャーの当日に思いつくことも多々ある。

十月のテーマが「ウイスキーと村上春樹」だった。村上氏がどれくらいウイスキー好きかについて知識はなかったが、著作に「もし僕らのことばがウイスキーであったなら」という一冊があることを知っていたし、ウイスキー嫌いのひとがこんな本を書くわけがない。この本のなかで村上氏はスコットランドの小島アイラ島の蒸留所を訪ね、話をきき、グラスを傾ける。ゆつくりと流れる文体のベース

かる。海底から地底、そして気がつけば自分という生命の底へ。

見まわせば、会場内のみんな、それぞれの「いちばんうまい、水割り」のおかげで、生まれた赤子のように顔を上気させ、生きている喜びをほとばしらせている。ウイスキーということばは、ゲール語で「命の水」を表す「ウスケボー」から来ている。

「私、ウイスキーって苦手だったんです。だから、今回はどうしようかなって」と、講座常連の女性がいった。

「でも、来て正解でした。ウイスキーって、ていねいに飲めば、こおんなにおいしいんですね」

はウイスキーの時間そのままで。

高校生のころだったか、テレビの画面に詩人の田村隆一が映り、思わず座り直したことがあった。詩人はアイラ島の蒸留所にいた。グラス半ばくらいまで、樽から黄金色の液体をそそぎ、ひと息にあおるか、と見るやそうではなく、いそいそ蒸留所の外に出ていく。建物の裏手へとカメラがまわる。薄暗い森のなかに、清らかなせせらぎが流れている。

詩人は膝を曲げ、新しいコップで川の水をくみあげると、もっていたウイスキーのグラスにとくとくと注いだ。そうしてグラスの縁を形のいくちびるに運び、つ、とふくよかに光る液体を注ぎ入れた。

たしか、こんな風にあった。

「世界でいちばんうまい、水割りだよ」講座「ウイスキーと村上春樹」では、二種類のシングルモルトを用意した。が、主役は実は、水のもりだ。こちらは三種類、じか

アイラ島のバーでオンザロックを頼むと、「お前は焼きたてのピッツァを冷蔵庫に入れるのか」といわれるそう。氷禁止。ソーダも邪道。命の水を味わうには、ストレートか「いちばんうまい、水割り」に限る。



## スコットランド



面積：7万8,772km<sup>2</sup>  
総人口：約525万4,800人(2012年)  
首都：エディンバラ  
最大の都市：グラスゴー  
公用語：英語とスコットランドゲール語。スコットランド語およびスコットランド英語も使用される。  
※グレートブリテン及び北アイルランド連合王国（イギリス）を構成するカンントリーの一つ。

### Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない」「選い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。

